

#### 1.1.4. 真宗大谷派の給仕式にみる葬送領域の情報化

土居 浩

### 序論

小稿は、プリント班における個人の最終年度報告として、真宗大谷派（東本願寺）の給仕式を資料として、葬送領域の情報化とはいかなることか、その考察を深める試みである。給仕式とは、世間でいうお仏壇へのお供えについての手引書である。昨年度報告の末尾では、以下の4冊に言及した（年代順）。

- 1846年（弘化三年）刊、『御給事式：在家内仏』
- 1898年刊、『明治おきうじ式』
- 1966年刊、『お内仏のお給仕と心得』
- 2013年刊、『真宗の仏事：お内仏のある生活』

共通するキーワードは「内仏」と「給仕（給事）」である。家内に安置した「お内仏」（お仏壇）への「お給仕」（お供え）をいかに整えるかを解説するのが、これら「お給仕式」と呼ばれる印刷物（プリント類）である。

時代的に古い給仕式では、式次第を淡々と列挙するだけの記述が、時代が新しくなるに従い、儀式の意義や他宗派との相違を説くことに重きが置かれるようになる。この傾向について、昨年度報告の時点では、江戸期と明治期それぞれの給仕式を対比して、大略を示した。すなわち弘化年間刊行の『御給事式』では、葬式の項目において、葬式の意義などは全く言及されず、仏壇（お内仏）の荘厳をいかにするか、勤行で何を唱える（読む）か、その点のみが淡々と列挙される。これが『明治おきうじ式』になると、わざわざ葬式の項目冒頭に「一生の大礼なれば力一杯大切に吊ふへし（＝弔うべし）」との一言が付される。昨年度報告ではこの点を、江戸期と明治期との相違点として強調した。しかしこの小稿で検討する、昭和戦前期から戦後にかけての給仕式の記述をみていくと、江戸期と明治期との相違として強調したこの点は、明治期と昭和期との相違に比べれば誤差の範囲といわざるをえない。そう指摘せざるをえないほどに、明治期と昭和期の給仕式とでは、大いに異なる。

以下この小稿では、資料とする給仕式の記述に沿いつつ、時代の変化を追いかける。具体的作業としては、『明治おきうじ式』以降に刊行され、『真宗の仏事』以前に刊行された昭和期の給仕式を検討する作業となる。

### 本論

#### 取り上げる給仕式一覧

まずは小稿が取り上げる給仕式を概観する。具体的に取り上げるのは、以下に示す昭和戦前期から戦後にかけて刊行された給仕式である（刊行年・書名・刊行主体の順に列挙）。

- 1898年刊、『明治おきうじ式』法藏館

- 1934 年刊.『在家御内仏行御給仕式一般』大谷派婦人法話会本部
- 1943 年刊.『お内佛お給仕の栞』大谷出版協会
- 1966 年刊.『お内仏のお給仕と心得』東本願寺
- 1984 年刊.『お内仏のお給仕』真宗仏事研究会
- 1994 年刊.『お内仏のお給仕と心得 真宗本廟参拝記念』
- 2013 年刊.『真宗の仏事』東本願寺出版

以下、給仕式ごとに目次構成を確認し、概観する（発行年表記において年号と西暦が混在するが、これは元の表記に拠る）。

### 『明治おきうじ式』

本書の発行元は法藏館、明治 31 年 3 月 29 日発行、緒言 2 頁+目次 4 頁+本文 54 頁。本書の目次構成は以下のとおり。

- 一月修正会
- 年中平日之心得
- 一月十四日五日 前住上人御祥月
- 一月廿四日五日 法然上人御祥月
- 一月廿七日八日 開山聖人例月御逮夜
- 同三季逮夜
- 二月十五日 釈迦如来御涅槃会
- 二月廿一日二日 聖徳太子御祥月
- 三月彼岸会
- 三月廿四日五日 中興上人御祥月
- 従五月一日至五日 本山酬徳会
- 七月十五日 孟蘭盆会
- 同三季逮夜
- 九月彼岸会
- 例年報恩講御取越
- 十一月本山御正忌
- 十二月三季逮夜
- 例月両親逮夜並祥月
- 例月先祖代代逮夜並祥月
- 十二月卅一日歳暮
- 両親之年回
- 先祖代之年回
- 見真大師御大遠忌
- 慧灯大師御大遠忌
- 真无量院巖如上人御年忌
- 移徙之事
- 葬式之事

- 中陰之事
- 百ケ日之事
- 収骨之事
- 御灯明之事
- 御焼香之事
- 御仏供之事
- 御花之事
- 如来様拝み様の事
- 御和讃 御文いた◇き様之事
- 御文何帖目と云事を知る歌
- 蓮如上人改悔文
- 附録

目次には挙げられていないが、実は目次よりも前の冒頭に「緒言」が置かれ、本書が刊行された経緯を簡潔に説明している。

このころ信徒来りて。在家内佛年内御給事式如何心得たるかよろしき哉も。予則其あらまし。一つ二つを示したるに。信徒曰く願くは其節目を書き與へ給へさすれば。老人を始め家内の者とも。御給事の好手本ならんやと。切りに請ひて止ます。よりて一は佛恩報謝の思ひより。一は奉佛者の定規てもならんかとの嗜より。拙き筆のまま記す。同志の人々これを見て梓にせんと乞ふ其請ひに任せて刻せし而已

この緒言そして目次に続き、本文ではまず年中行事が示され、次いで年忌、そして葬式からの一連の儀礼（葬式・中陰・百ケ日・収骨）の説明が続く。附録では「家内之者心得」と題して、「亭主」「老人達」「内儀達」「子供」それぞれの心得が説かれる。

緒言と附録を除く本書の目次構成は、ほぼ弘化年間刊行の『御給事式』と同一である。内容的にも、目次に取り上げられた儀式それぞれにおいて、仏壇をいかに荘厳するか、勤行で何を唱えるのか、その手順を説明する点においては、江戸期も明治期も同様である。これが以下にみるように、昭和期の給仕式になると、目次構成そのものが大いに異なる。

### 『在家御内仏勤行御給仕式一般』

本書は発行者は大谷派婦人法話会本部、昭和8年11月5日印刷・昭和9年1月10日発行、目次3頁+本文81頁。参照したのは昭和9年12月20日発行の第5版である。本書の目次構成は以下のとおり。

- 第一 信は荘厳より
- 第二 平日
- 第三 (第一) 勤行式中の声明、節譜の名称や術語について
- 第三 (第二) お勤めの仕方
- 第四 正月
- 第五 彼岸

- 第六 孟蘭盆
- 第七 報恩講（御正忌、おとりこし、御七晝夜）
- 第八 年忌及び祥月
- 第九 御本尊並に仏壇移徙（おわたまし）
- 第十 葬式中陰
- 附録一 仏式結婚作法次第
- 附録二 門徒出産児手次寺に初参りの次第

冒頭に、全体の概説となる「信は莊嚴より」が配されている点は、先にみた『明治おきうじ式』の目次構成と大いに異なる点である。さらにそこでの指摘が、各家庭で「分相応の御内仏を御安置」されているものの「朝夕の勤行や御給仕式の一般」については「大分まちまち」である状況、中でも都会では「甚だしくまちまち」であることに対する懸念である。中でも懸念されているのが、次の引用で示すように、葬送領域（葬式・中陰など）である。

殊に家庭に不幸があり葬式中陰の間の御内仏の御給仕式等はそれが立派な真宗当派の御門徒であるにも拘はらず何宗とも云へない雑多の方式が混同して用ひられ、始めて御参りに行つた際一寸何宗の家か判断のつかぬやうな場合が往々あるのであります。

また「附録」として「仏式結婚作法」と「初参り」の次第が掲載されている点も、『明治おきうじ式』では取り上げられていない事項として、特筆すべきである。結婚式と初参りは、本書中でも言及されているように、「大正十二年、今上陛下の御成婚を期として、真宗各派協会に於て一定の作法が議決され」たことを承けての紹介である。結婚式と初参りは、その作法が制定された時期からして、『明治おきうじ式』には含まれようがなかった。これ以降の給仕式において、仏前結婚式は基本的に「附録」として紹介されることになる。

### 『お内佛お給仕の葉』

本書は東本願寺参拝部の編集で、発行は大谷出版協会、昭和 18 年 3 月 30 日発行、序 2 頁+目次 2 頁+本文 36 頁。本書の目次構成は以下のとおり。

- 第一 御内仏
- 第二 平日
- 第三 例月命日
- 第四 祥月命日
- 第五 年忌（法事）
- 第六 正月
- 第七 彼岸（春秋）
- 第八 孟蘭盆
- 第九 報恩講
- 第十 御本尊並に仏壇移徙
- 第十一 葬式
- 第十二 中陰

前節で取り上げた、戦前期の給仕式である『在家御内仏勤行御給仕式一般』と比べると、刊行が戦時期であるためか総頁数は少なく、さらに記述そのものもきわめてシンプルであり、江戸期や明治期の給仕式に似ている。しかし本文に先立って配された「序」の冒頭にみられる以下の引用をみると、明らかに戦前期からの流れにある（＝明治期とは異なる）ことがうかがえる。

古来「信は莊嚴より起る」と教へられてみますが、まことに金言といふべきであつて、今日の如き匆忙動乱の世局にあつて、ややもすれば、嚴重であるべき仏祖崇敬の忘れがちな私共の深く味ふべき言葉であると思はれます。

この引用に「今日の如き匆忙動乱の世局」とあるように、同じく「序」には戦時期ならではの文句が散見される。曰く、「祖先崇拜の道場であるお内仏（お仏壇）」「時局下日本国民の一人としての責任を完遂」「時局柄物資欠乏のため、規定通りのお莊嚴お給仕の出来兼ねる場合もあると思はれ」云々。

この戦時期の給仕式である『お内佛お給仕の栞』の本文構成は、先行する戦前期の給仕式と同様、中核となる「正月」以降「葬式・中陰」までの構成が同一である。この構成は、以降、年中行事と葬儀・中陰として継承される。

## 『お内仏のお給仕と心得』

本書は東本願寺の式務部が監修で、発行は東本願寺出版部、昭和41年7月15日初版、口絵5頁+目次および本文129頁。参照したのは同年11月20日再版である。本書の目次構成は以下のとおり。

- 第一章 信心と礼拝
- 第二章 お仏壇とご本尊
- 第三章 お給仕の実際
- 第四章 年中行事（その莊嚴とおつとめの仕方）
- 第五章 葬儀と中陰
- 附録・仏前結婚式

この「年中行事」内の配列は、以下にみるように、『在家御内仏勤行御給仕式一般』と同様の並びになっている。

- 修正会（お正月）
- 彼岸会（春・秋の彼岸）
- 盂蘭盆会（お盆）
- 報恩講（お取越）
- 歳末昏時（歳末勤行）
- 年忌と祥月
- ご本尊並に仏壇移徙（おわたまし）

本書では、各項目の書き出しに「問」が掲げられ、それへ回答する形式で、記述がなされている。この点は、これまでの給仕式とは大いに異なる形式である。また挿図には、絵画だけでなく写真も多く用いられている点も、これまでと大きく異なっている。

### 『お内仏のお給仕』

本書の編著者は真宗仏事研究会、発行は法藏館、1984年4月1日初版第1刷発行、口絵6頁+目次および本文77頁。参照したのは1991年3月30日発行の初版第14刷である。本書では、第何章のように明確な章番号は付されていないが、以下の4セクション順に並んでいる。

- お仏壇の心得
- おつとめの心得
- 仏教行事の心得
- 法事の心得

なお本書は、小稿で取り上げる他の給仕式と異なり、東西両派（真宗大谷派・浄土真宗本願寺派）についての概説書となっている。そのため記述内容も、他の給仕式と比べると極めて簡潔であり、より基本的・入門的な事項が列挙されている。また、あとがきで「写真を見ていただくだけで、一応の用が足せるようになっていきます」と記されているとおり、本文中には多くの写真が使われている点も、特徴である。

### 『お内仏のお給仕と心得 真宗本廟参拝記念』

本書は平成6年10月25日発行、巻頭言1頁+口絵4頁+目次および本文129頁。本書の奥付には、タイトルと発行年月日そして非売品であることが記されるのみで、編著者および発行者については記されていない。しかし以下に示す目次構成にみるとおり、昭和41年（1966年）に刊行された『お内仏のお給仕と心得』（前掲）の、改版である。

- 第一章 信心と礼拝
- 第二章 お仏壇とご本尊
- 第三章 お給仕の実際
- 第四章 年中行事（その荘厳とおつとめの仕方）
- 第五章 葬儀と中陰
- 附録・佛前結婚式

本書には巻頭言として「今日の仏事をご縁として」が掲載され、「今、ここに収骨された忘れがたい方々は、親鸞聖人のご真影とともに、いつまでも生きとおされることとあります」と書き始められている。真宗大谷派においては「収骨」と「納骨」とは区別されており、ここでの「収骨」とは、遺骨を真宗本廟（東本願寺）へおさめることである。本書表紙の肩書きに「真宗本廟参拝記念」と銘打たれるのは、本廟へ「収骨」した際の「参拝記念」と推察される。以下の引用では、本書が刊行された当時、「仏事」や「法事」が追善供養とほぼ同義とされていることへ対する懸念が、示されている。

この頃は仏事とか法事とかいいますと、亡くなられた人々のためにつとめる追善供養のように考え、納骨とか収骨とかの場合もそれと同じように思っておられるようでありま

す。これは大きな心得ちがいがあります。仏事、法事という文字があらわしているように、それは仏法のための仕事であります。

現状認識としては「大きな心得ちがい」に懸念を示しつつも、収骨や納骨を契機として、本来の意味での「仏事」「法事」へと誘い導くために、本書が位置づけられていることが、うかがえる。

本書は、戦後版給仕式の基本書（その改版）とみることができる。本書の「あとがき」には「この書の初版が出てから、もう十数年たちました」と記され、また次にみる『真宗の仏事』の「あとがき」では本書について、その刊行後も「数十年が経ち、今もなお大切に活用」され続けていると紹介されており、ロングセラーであることがうかがえる。

### 『真宗の仏事』

本書の副題は「お内仏のある生活」で、東本願寺出版の編集発行、2013年11月28日発行。参照したのは2021年7月15日発行の初版第8刷であり、プリント班として研究に携わった期間中に、東本願寺境内にある総合案内所の書籍コーナーで平積みされていた一冊、つまり報告者がその場で購入した、現役の給仕式である。本書の目次構成は以下のとおり。

- お内仏の荘厳
- お内仏の仏具とお給仕
- 平常の勤行と作法
- 帰敬式と法名
- 葬儀・中陰・年忌・月忌・納骨
- 定会法要（年中行事）

これまでみてきた給仕式と、目次構成の上で大きく異なっている点は、仏前結婚式が取り上げられず、「帰敬式」が取り上げられた点である。「帰敬式」は「おかみそり」とも呼ばれ、仏弟子となるため三宝に帰依し法名を授かる儀式のことである。帰敬式（おかみそり）については、これまでの給仕式でも言及されていたが、葬式（葬儀）を説明する際に言及されており、帰敬式が特筆されていたわけではなかった。また、これ以前の給仕式では、年中行事が解説された後に、葬儀・中陰等々が説明される順序だったものが、本書では入れ替わっている点も、注目すべき変化である。

以上、小稿で取り上げる7冊の給仕式を概観した。

以下、節を改め、昭和期の給仕式における葬送領域（葬儀・中陰から納骨・収骨まで）の記述を取り上げ、検討する。

### 昭和期の給仕式における葬送領域の記述

この節では、昭和期の給仕式における葬送領域の記述を取り上げ、検討する。すでにみたように、明治版の給仕式である『明治おきうじ式』と、昭和期戦前版の給仕式である『在家御内仏勤行御給仕式一般』とでは、目次構成から大いに異なり、戦前版の構成は基本的にその後の昭和期の給仕式へ継承されたとみることができる。前節でみた7冊の給仕式のうち、特に昭和

期に刊行された4冊は、東西両派を対象とする『お内仏のお給仕』を除くと、ちょうど昭和期の戦前・戦時・戦後に対応する。なお1994年刊の『お内仏のお給仕と心得 真宗本廟参拝記念』は、戦後版の改版となる。

- 1934年刊.『在家御内仏勤行御給仕式一般』＝戦前版
- 1943年刊.『お内佛お給仕の栞』＝戦時版
- 1966年刊.『お内仏のお給仕と心得』＝戦後版

以下、昭和期給仕式の戦前版・戦時版・戦後版それぞれについて、葬送領域の記述内容を概観し、検討する。

### 戦前版の給仕式の給仕式における葬送領域の記述

戦前版となる『在家御内仏勤行御給仕式一般』のうち、葬送領域を説明する「第十 葬式中陰」章の節構成は、以下のとおり。

- 一、臨終の節
- 二、遺骸について
- 三、納棺
- 四、御通夜
- 五、出棺
- 六、野の勤行
- 七、拾骨並に灰葬
- 八、還骨の行勤
- 九、中陰中お内仏の荘厳
- 十、中陰壇の荘厳
- 十一、中陰中の勤行
- 十二、葬式の際における諸種の迷信や異式

この戦前版では、見出しとは別に太字表記されている部分が複数箇所ある。一例を引用で示す。引用のうち下線部が、この戦前版では太文字となっている。

読経は御内仏または臨終仏に向つてするのでありまして、決して遺骸に向つてするのではありませぬ。

太字で表記される論点は、仏事・法事に関して世間的には一般常識とみなされる事象について、実はそうではない、との指摘である。具体的事例としては、中陰になるまでは御経を読まない方が正式であること、遺骸の枕辺に用意する灯明と不断香は遺骸に供えるわけではないこと、通夜は静かに遺骸を見守る番をするのが本旨（大勢で終夜雑談にふけるのはもつてのほか）であること等々である。

そもそもこの戦前版では、太字表記に限らず、しばしば、「余宗」（＝仏教の他宗派）はこのようなが「当派」（＝浄土真宗）はそうではない、との語り口がみられる。たとえば、通夜で遺骸に対し種々のものを供えることは「余宗でやる事で当派の法式には之亦全くない事であります」の記述が代表的である。明瞭なのが「十二、葬式の際における諸種の迷信や異

式」で、よく知られる葬儀のしきたりが取り上げられ、浄土真宗ではそうではない、と説かれる。

- 棺内に六文銭を入れる
- 葬列を出す際、門火を焚き、茶わんを割る
- 位牌をつくり水を供える
- 友引や卯の日を忌む

このような語り口は、続いてみる戦時版・戦後版でも継承されている。

### 戦時版の給仕式における葬送領域の記述

戦時版となる『お内佛お給仕の栞』のうち、葬送領域を説明する「第十一 葬式」「第十二 中陰」章の節構成は、以下のとおり。

- 葬式
  - 一、臨終
  - 二、通夜
  - 三、葬式
  - 四、灰葬
  - 五、還骨勤行
- 中陰
  - 一、莊嚴
  - 二、お給仕
  - 三、勤行

戦時版は総頁数も少なく記述も簡潔だが、戦前版の内容が継承されている。たとえば「臨終」項では、「読経」についての解説中、「読経は御内仏、又は臨終仏に向つて行ひます」と（ ）で補記されており、戦前版と同内容であることが確認できる。また、当派はそうではない、との語り口は「通夜」項で確認できる。

遺骸に対する白木の膳、檜の葉を浮せた水は当派の法式にはありません。又御詠歌は当派の勤行ではありません。

さらに「通夜の勤行は正信偈、念仏和讃のお勤めが普通でお経ではありません」も、当派はそうではない、との語り口にきわめて近い。この語り口、戦時版では紙幅の都合で分量が抑えられたと思われるが、戦後版では戦前版と同等かそれ以上に記述されることになる。

### 戦後版の給仕式における葬送領域の記述

戦後版となる『お内仏のお給仕と心得』のうち、葬送領域を説明する「第五章 葬儀と中陰」の節構成は、目次と本文とで若干の異同がある。以下ではその概略を示す。

- 葬儀に関する諸式
  - 臨終の時
  - 納棺

- お通夜
- 葬儀
- 荼毘
- 告別式
- 灰葬・還骨
- 中陰から忌明まで
  - 中陰
  - 忌明
- 葬儀のころと迷信について
- 納骨について

この戦後版は、先にみたように、各項目の書き出しに掲げた「問」へ対する回答する形式で本文が記述されている。その問答の中で、戦前版・戦時版と確認された語り口、すなわち、浄土真宗はそうではない、との語り口が散見される。二例、挙げておく。

問 納棺の時、わらじや杖など入れるということを聞きますが……。

真宗ではそんなことはいたしません。（後略）

問 葬儀は「友引」の日に行なわないとか、その他さまざまなことを申しますが。

（中略）まったく迷信です。

なお戦後版の改版となる『お内仏のお給仕と心得 真宗本廟参拝記念』との比較すると、迷信の解説等で若干の異同がみられるが、この微細な異同の検討は次の機会としたい。

## 考察

以上みてきた昭和期の給仕式における葬送領域の記述を踏まえ、プリント班における個人の最終年度報告の総まとめとして、考察を試みる。

まず確認できることは、時代的に古い給仕式では、式次第を淡々と列挙するだけの記述が、時代が新しくなるに従い、儀式の意義や他宗派との相違を説くことに重きが置かれるようになる傾向であった。これは昨年度報告として江戸期と明治期の給仕式を対比し、またそれを踏まえ、ここまでの小稿で昭和期の給仕式をやや細かく検討した結果、導き出されたことである。特に昭和期の給仕式において、他の宗派あるいは世間ではこのようにされるが、浄土真宗ではそうではない、との語り口が通底していた。この語り口は、儀式の意義を説く際に、また他宗派との相違を説く際に、きわめて有効である（と少なくとも給仕式の著者は認識している）ことは、戦後版の「葬儀のころと迷信について」項の末尾近く、最後の問を掲げる直前のフレーズからも、裏付けられるだろう。問答を交わす中で、他宗派との相違を何度も説かれた後での記述であり、本文ではすべて太字表記になっている。

問 ありがとうございます。それで葬儀のことはハッキリしました。そうしてみると、私たち真宗の葬儀こそ、ほんとうに法にかない、また礼にかなったやり方ですね。（後略）

このような記述は、現時点で参照しえた江戸期および明治期の給仕式においては、確認できない。さらに踏み込めば、簡潔な記述である戦時期はもちろん、戦前版の給仕式でも、このように「私たち真宗の葬儀こそ、ほんとうに法にかなない、また礼にかなったやり方」であると、浄土真宗を称揚する記述は、確認できない。あくまで戦前版・戦時版では、他宗派と浄土真宗との相違が指摘され、浄土真宗ではこのようにする／しない、と解説されるに留まる。先にみたように、戦前版の冒頭「信は莊嚴より」の中でも表明された懸念は、葬送領域における「立派な真宗当派の御門徒であるにも拘はらず何宗とも云へない雑多の方式が混同して」用いられている事態であった。

さて、昭和期の給仕式に対し、後続する給仕式といえる『真宗の仏事』においては、戦後版の給仕式にみられた浄土真宗を称揚する記述は、確認できない。その意味では、戦後版にみられた先の記述は、小稿でみてきた給仕式の記述から眺めると、やや特異であると指摘できる。以下では、小稿で取り上げた給仕式に後続する給仕式として『真宗の仏事』における葬送領域の記述を概観し、現在へと繋がる問題として考察を深めたい。

### 『真宗の仏事』における葬送領域の記述

本書『真宗の仏事』のうち、葬送領域を説明する「葬儀・中陰・年忌・月忌・納骨」章の節構成は、以下のとおり。

- 葬儀について
- 葬儀に関する諸式
  - 命終に臨んで
  - 枕飾り
  - 枕勤め
  - 納棺
  - 葬場の莊嚴
  - 通夜
  - 葬儀
  - 灰葬・還骨勤行
  - 中陰
  - 中陰中のお内仏
  - 中陰中のおつとめ
  - 満中陰（四十九日・忌明け）
- 葬儀にかかわる「迷信」
- 法事（年忌法要）
  - 年忌法要・祥月命日の莊嚴
  - 年忌法要のおつとめ
- 祥月命日と月忌
- お墓について
- 真宗本廟収骨

- 大谷祖廟納骨

葬儀に対する基本認識としては、「葬儀について」節の冒頭で「各地の真宗門徒の生活習慣のなかで、葬儀はもともとお寺を中心に地域の人たちが寄り合っつとめられて」いたと書き出されていることから、地縁関係を基盤としていることがうかがえる。もちろん現状認識としては、葬儀を寄り合っつとめることが難しくなっていることが指摘されている。

「葬儀に関する諸式」節では、1972年に宗派が告示した「葬儀並びに葬儀前後の行事について」に基づき、あらましが述べられる。

「葬儀にかかる「迷信」」節では「清め塩」や「友引」についての見解が、「法事（年忌法要）」節では一般的には追善供養と考えられている法事を浄土真宗としてどうとらえるかについての解説が、「祥月命日と月忌」節では親鸞・蓮如の命日と関連付けての説明が、それぞれ記述されており、浄土真宗として葬送領域をどう理解・解釈するかが表明されている。それに対して「お墓について」節では、今日の人々の暮らしでは「墳墓の地」を離れて新たな生活の場をもつようになっていること、それで「つながりを失い、不安が強くなって」いること、それが「お墓や葬送について、さまざまなあり方を志向させて」いるとの見解が示されており、浄土真宗としての理解・解釈が表明されているわけではない点は、現在の問題として留意しておきたい。

この『真宗の仏事』を報告者が購入した際、並んで平積みされていたのが、『浄土真宗 仏教・仏事のハテナ?』（東本願寺出版、2017年）である。同書では葬送領域を「葬儀・法事とお墓のハテナ?」章にまとめ、以下の節構成で記述している。

- お焼香
- 弔電・弔辞
- 迷信—清め塩
- お墓
- 通夜・葬儀
- 中陰
- 法事・年忌法要
- 法事での持ち物・服装
- 金封の表書き

『真宗の仏事』と『仏教・仏事のハテナ?』と、それぞれが取り上げる葬祭領域の話題について比較すると、『仏教・仏事のハテナ?』の方が、より初心者・一般向けの著述となっている。たとえば『仏教・仏事のハテナ?』の「弔電・弔辞」節では、真宗では「冥福」を用いないことが解説される。「迷信」章では、清め塩や、茶碗を割る風習を取り上げ、「さまざまな迷信に惑わされている我が身が照らされ」と指摘される。「お墓」節では、墓相・方角・日の良し悪し、また墓の大小にとられる必要がない、と明言される。このように『仏教・仏事のハテナ?』では、「真宗ではこのようにする／しない」の明言・断言が多く、きわめてわかりやすい。

『真宗の仏事』と『仏教・仏事のハテナ?』と、両者に共通する葬送領域の話題として、通夜と葬儀がそれぞれどのように説明されているか比較すると、『真宗の仏事』が葬儀から中

陰・満中陰までの一連の流れを説明するのに対し、『仏教・仏事のハテナ?』では、その手前の段階で必要となる対応について、説明している。実際、『仏教・仏事のハテナ?』の「通夜・葬儀」節には、以下の小見出しが並ぶ。

- まずは、お寺に連絡を
- ご遺体を安置する部屋は? 向きは?
- 納棺の際の衣服は?
- 葬儀の日取りは?
- 葬儀壇はご本尊を中心に
- 迷信に惑わされることなく

『真宗の仏事』と『仏教・仏事のハテナ?』は、同じことを別の角度から説明していると読むことができる。両書の違いを強調するならば、『真宗の仏事』に比べ、『仏教・仏事のハテナ?』は葬送領域の中でもより俗事に関わる事柄を説明している。一方で『真宗の仏事』では、真宗的意義の説明が、より前面に出ている。とはいえ全く異なることを述べているわけではない、『真宗の仏事』では問われない前提のようなこと（これを先に「俗事」と指示した）に、『仏教・仏事のハテナ?』は力点を置いている。

この両書の相違を加味しつつ、小稿で検討した昭和期の給仕式における葬送領域の記述を踏まえて考察すると、葬送領域における情報化は、時代が新しくなるに従い、浄土真宗のしきたりを知らない読者へ向けて情報発信する方向へと展開してきた、と解釈できる。逆に言えば、より古い給仕式は、ある程度は浄土真宗のしきたりを知っている読者に対して書かれたマニュアル、と言い換えられる。ここでマニュアルにたとえたのは、しきたりを知っている／知らないの別を、実際に行為（読経、声明念仏など）するかどうかと同義だとみなしたいがためでもある。

## 結論

小稿では真宗大谷派の給仕式を資料として、その明治版から昭和戦前版・戦時版・戦後版それぞれと、現行版である『真宗の仏事』における葬送領域の記述を検討し、時代を経るに従っての傾向を確認した。その傾向とは、時代的に古い給仕式では、式次第を淡々と列挙するだけの記述が、時代が新しくなるに従い、儀式の意義や他宗派との相違を説くことに重きが置かれるようになる傾向である。これは、より古い給仕式がある程度は浄土真宗のしきたりを知っている読者に対して書かれたマニュアルであったのに対し、時代が新しくなるに従い、浄土真宗のしきたりを知らない読者へ向けて情報発信する方向へと展開してきた、と解釈できる。昭和期の給仕式において、他の宗派あるいは世間ではこのようにされるが、浄土真宗ではそうではない、との語り口が通底するのも、浄土真宗のしきたりを知らない読者へ向けての有効性が期待されているからと推察される。ただしその語り口の延長上として、浄土真宗を称揚する記述は、戦後版の給仕式でのみ確認ができ、小稿でみてきた給仕式の中ではやや特異である。

さて、そもそもこの調査報告は、初年次報告「オンラインショップにみる葬祭領域の印刷物について」において、ビジネス用語が蔓延する現在の「供養業界」における印刷物群の中で、それでもなおビジネス用語とは異なる語り口の印刷物として、給仕式を再発見したことが契機

であった。ついで次年度報告「真宗の給仕式にみる葬祭領域の情報化」において、小稿に先立ち、現行の給仕式である『真宗の仏事』（前掲）を含む4冊の給仕式に言及したことは、小稿の冒頭で述べたとおりである。最終年次報告であるこの小稿は、給仕式を葬送領域の資料として取り上げたこと自体、一定の意義があったと判断しているが、それに留まらず、近代仏教史研究として葬送領域に接近する可能性を示唆できたと判断している。次なる展開としては、「情報」から踏み出して「メディア」についての考察を深める必要があるが、これについては次なる機会を待ちたい。

以上